

# ビデオモニターを活用し、学習理解を直ちに確かめ合うことができる学習指導方法の研究

～発表・表現時の表情等をビデオモニターで確認し、つなぎ合う授業の工夫～

八女市立矢部中学校

〒834-1401  
福岡県八女市矢部村北矢部11047-2

<http://www2.ocn.ne.jp/~yabe-jh/index.htm>

## 1 はじめに

本校は全校生徒39名という小規模校で、教科センター方式という教科型教室を採用しているために学習環境は大変落ち着いている。しかし、生徒の学習への取り組みは、学習用具の準備等といった学習規律はある程度身につけているものの、自ら計画的に学習実践する生徒は少なかった。また、自分の意志を正確に伝えることを苦手としていたため、自分の考えを伝えられず相手に安易に同調してしまい、自分の言動に自信が持てず自己効力感を高く保つことができないといった課題を抱えていた。

そこで「学習意欲の高揚と伝える力の育成」と「学校行事等に主体的に取り組む生徒の育成」をめざして、「間違った発言の価値を認める」等の共感的人間関係の構築に取り組み、「考えをつくる」「交流する」「発表する」を1サイクルとした「言語活動を重視した授業づくり」の推進に取り組んできた。

この授業において単に言葉としての伝える力ではなく、表情を互いに読み取りながら言葉に含まれる心情をも「伝えること・読み取ること」ができる授業づくりをめざした。

## 2 研究の目的

ビデオモニターは、発表した生徒の表情をリアルタイムに確認することができ、生徒自身の発表時の心情を読み取ることができると考える。また、ビデオカメラの録画機能を使えば、運動動作を自分自身で確認でき、不合理な動作の修正等が容易にできる。以上の点から、自分の考えをまとめたり発表したりすることができ、自己効力感の向上にもつなげることができる大変有効な学習機材であると考えた。

そこで本研究の目的は、ビデオモニターを活用し、学習理解を直ちに確かめ合うことができる学習指導方法の研究することを目的とする。

## 3 研究仮説

「言語活動を重視した授業づくり」の手段としてビデオ機器を活用するならば、発表・表現時の表情等を発表者も含め学習者全員が確認でき、学習内容をつなぎ合う授業を実践できるであろう。

## 4 研究の内容と方法

- (1) 生徒の表情を確認するための効果的なモニターやスクリーン活用の在り方
- (2) 伝える力の育成と ICT 機器の活用
- (3) ICT機器活用リテラシーの向上について

5 研究の経過

I 授業実践より

本校がめざす「学習意欲の高揚と伝える力」と「学校行事等に主体的に取り組む生徒の育成」にあたって、「発表・表現」について次のように共通理解して研究を進めた。

- 各教科の特性に応じて、年間計画の中に重点的に取り組む単元を設定する。
- 単元または1時間の授業の中で行う「発表・表現」のねらいを明確にする。
- 発表を重視し、意志を正確に伝える授業を実施する。（国語・英語）
- 表現を重視し、身体動作を大きくする授業を実施する。（音楽・保健体育）

(1)伝える側の表情を読み取り紹介文の言葉と提示モデルの一致を図る効果的なICT機器の活用（ビデオレターの活用）

〈実践例〉 「英語：Multi Plus 1 文化紹介」

〈本時のねらい〉 「ビデオレターを活用して紹介文の構成や使える表現に気づくことができる」

〈学習過程とICT機器の活用〉

	学習活動・内容	ICT機器の活用
①	挨拶をし、英語読みの練習を行う。	
②	A L Tからのビデオレターを大型モニターで見る。	ビデオ視聴の時間を取り、1回目は途中で止めずに見せ、日本語メモを取らせる。
③	手元のモデル資料とビデオレターを比較する。	内容理解のためにモデル資料を配り、A L Tの言葉の聴き取りが不十分な場合は、途中で止めて繰り返し見せたりする。
④	ビデオレター作成原稿を英語で書く。	
⑤	返信のビデオレターを作成する。	ビデオカメラに向かって、原稿を英語で正確に発表する。



← 学習活動②



学習活動③ →



← 学習活動④



学習活動⑤ →

〈授業検討会の分析〉

- ・ビデオモニターの活用は、教師の説明も生徒の説明も視覚からも捉えられてよかった。
- ・板書構成もよく、モデル資料の提示もよかった。
- ・授業のめあてをもう少しはっきりさせる必要があった。
- ・授業のゴール像があいまいだった。

〈指導主事による指導助言〉

- ・授業展開として、ビデオレターの活用で始まったことは有効なICT機器活用だった。
- ・「伝え合う力」の育成に関しては、もう少し日本語メモをもっと構造化するべきではなかったか？
- ・「Show and tell」をゴールにおくと、生徒はまとめやりやすかった。

(2)演技や運動動作に対する自己イメージと現実動作のギャップを埋めるためのICT機器の有効的活用

〈運動動作の修正〉

〈実践例〉 「保健体育：器械運動『マット』」

〈本時のねらい〉 「後転グループ技のポイント意識して練習し、伸膝後転ができるようになる」

〈学習過程とICT機器の活用〉

	学習活動・内容	ICT機器の活用
①	めあての確認	模範演技をビデオで再生する。
②	後転グループ技の練習	
③	技のポイントを理解し、伸膝後転の練習	押さえるべき技のポイントをチェックできるようにビデオカメラで撮影する。
④	演技映像を見て、修正ポイントの確認と伸膝後転を再度練習	撮影した映像を再生しながら、修正すべき技のポイントを確認させる。 生徒自身がビデオカメラを使って、友だち同士で運動動作を撮影させる。
⑤	学習のまとめ	ねらいを達成できなかった点を、ビデオの映像を通して確認させ、次時の課題とさせる。



活動①



活動③



活動④



活動⑤

(授業検討会の分析)

- ・授業風景を同時に映し出すことができたのは今後の授業に役立つ。
- ・生徒自身の演技が直ちに確認できたことは、自己イメージとのギャップを埋めるのには有効な手立てだったと言える。
- ・ビデオ操作に時間を取られすぎの感があった。
- ・できる生徒とできない生徒の違いに気づいていない。この気づきを指導する。
- ・模範演技は動画ではなく、連続写真の方がよかったのでは？

〈指導主事による指導助言〉

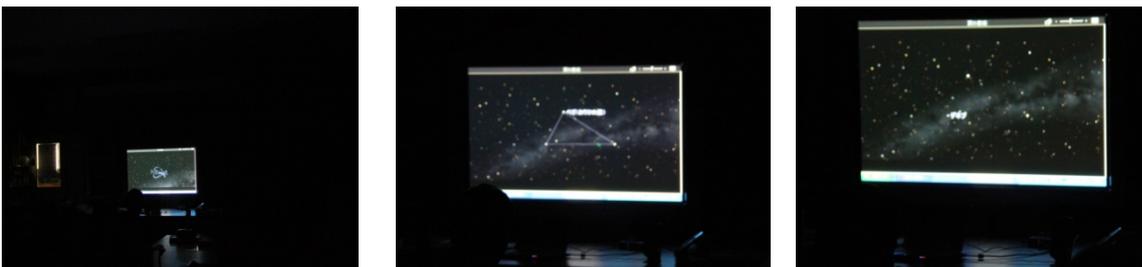
- ・無駄がなく学習に従事している時間が長いため、練習時間がたくさん取れている。
- ・子ども同士、教師との距離感が近いのでよい学習環境である。お互いが肯定し合っている。
- ・ビデオ機器を活用した教材の解釈はどうだったのか？教材解釈は3つに分類できる（機能的分析・構造的分析・効果的分析）。体育は動きが中心なので技がよりよくできることで学習意欲が高まる。ここにうまくビデオ機器を活用すれば、技能向上だけでなく自己効力感も高まっていくと考えられる。継続的な学習への取り組みに期待したい。

## II その他の取り組みから

### (1)理科教材への活用

天体の学習において単に天体の学習ソフトをモニターに映し出すのではなく、よりリアル感を出すために暗幕を引き、パソコンと大型モニターを活用して拡大し、教室全体に夜空を人工的に作り出して星座の確認などをしながら天体に関する学習を行った。日常とは違う学習環境の中で、具体的な星座の解説を聞くことは、生徒にとって天体を理解する上で大変有効であった。

また、ICT機器をこのように活用できることに対して大きな興味を抱き、積極的な活用をするようになった。



### (2)保護者・地域住民へのダンス発表の公開

保健体育の授業で学習したダンスを、保護者や地域住民の方を招いて発表会を実施した。プロジェクターとビデオカメラそれぞれ2台ずつを使ってスクリーンに映し出し、より迫力ある動きを披露することができた。

この発表会を経験したことは、生徒にとって人前で表現する難しさを味わったが、それ以上に、生徒全員で練習を積み重ねて、ひとつのものを作り上げる達成感と成就感を味わい、その結果大きな自信を得ることができた。



## 6 研究の成果と課題

### (1) 成果

本校生徒は、これまで学習に対して積極性に欠けていたが、ICT機器の活用を積極的に行ったことで自分の発言や表情を常に確認できるようになり、学習に対する積極性が高まったことが生徒の学習アンケート結果などから読み取ることができた。また、運動動作においても、イメージと実際の動作のギャップを直ちに修正できる機会が増えたため、自信を持って運動に取り組むことができるようになった。このことは、運動の場面に限らず自信を持つことができるようになり、自分自身に対する肯定感も高まった。具体的な内容は以下のとおりである。

- ・発表時に発表者の表情を注視する生徒が増えた。
- ・発表者の発言内容をつなぐ発言を心がける生徒が増えた。
- ・音楽や保健体育の授業において、表情を豊かに学習へ臨む生徒が増えた。
- ・ICT機器のセッティングに慣れ、学習準備が素早く行えるようになった。
- ・ICT機器を活用して、情報を整理し発表用資料を作成して主体的に発表できるようになった。
- ・ICT機器が授業や諸行事の中で日常的に活用されるようになった。
- ・ICT機器が情報を伝える手段として頻繁に活用されるようになった。

### (2) 課題

ICT機器の有効的な活用は教科によって温度差が生じた。具体的には、表現場面や発表場面が多い教科や学習単位では大変有効であった。しかし、それ以外の場面ではICT機器の活用方法については、あまり有効的ではなかったために、本校の特徴である教科型教室とうまく連動させて活用できるような研究を次年度以降も深めていきたい。

また、ICT機器の種類によっては使いやすさや頻度に差があった。特に、電子黒板はどの教室でも活用できるものであったが、教職員のリテラシー不足により十分な活用ができなかった。次年度は、電子黒板の活用についての研修を深めて行く必要がある。